

経済の真・善・美

レンゴー会長兼社長

大坪 清



正月新たな抱負を胸に仕事を始められた方も多いと思う。哲学者プラトンは「真・善・美」こそが人間が本当に追求すべき基本だということも真・善・美を求めていくことが大事であり、その逆は「偽・悪・醜」となる。

米国流の金融工学をベースとした経済が今や世界を席卷しつつある。それは金融資本主義といっている。それは最近やや度が過ぎるのではないかと感じている。

経済の基本は、いうまでもなく資本、労働、土地で財貨とサービスを生み出すことだ。これらの生産要素をもとに、資材となる生産財を使って財やサービスを商品とし

て生み出していくのが本来の姿だが、一部のビジネスでは生産要素である資本と労働までも商品化（コモディティ化）してしまっている。言い換えれば、経済が現場からどんどん遠のいていともいえないか。これは金融工学の発展に伴う、負の側面といえるが、生産要素の商品化をこれ以上すべきではない。

福沢諭吉の「学問のすすめ」は、冒頭にある「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」が有名だが、その後書かれていることまで覚えておられる方は意外と少ないのではないか。「学問とは、ただむずかしき字を知り、解（げ）し

難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど、世上に実のなき文学を言うにあらざ。中略）されば今、かかる実なき学問はまず次にし、もつぱら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり」と記されている。

諭吉翁は実学を学ぶ大切さを説き、人間が必要とする学問、それこそが「サイヤンス（サイエンス）」であるという。それをするのとはしないのでは、天（雲）と地（泥）ほどの差が生じ、文字どおり雲泥の差となる。

昨今の行き過ぎた金融資本主義的経済状況をみるに、この「学問のすすめ」に書かれた実学の大切さをあらためて思い起こさずにはいられない。米国におけるトランプ大統領誕生の背景も、実業の衰退に対する危機感の表れといえなくもない。偽・悪・醜とまではいわないにしても、金融経済の伸びにより成長を演出してきた米国経済だが、数字はなんとかつくられても、雇

用不安と所得格差が社会の均衡ある発展という観点で大きな影を落としている。

世界はますます不安定化しており不確実性が高まっている。わが国は「失われた20年」といわれながらも、社会経済の基盤は世界を見渡しても屈指である。それは取りも直さず、実学を尊ぶ精神が底流にあればこそであろう。堅固なインダストリー（製造業）をキープしていることは、今後とも経済を再生し世界に伍していく観点からも大きなアドバンテージとなる。

2020年には東京を舞台にオリンピック・パラリンピックという一大イベントも控えている。西年の今年、この不透明な世界に向けて、夜明けの一番鶏のごとく、未来に希望の太陽を導く先導役となるよう、現場の真理に耳を澄まし、実学に徹しながら、自信をもって経済の真・善・美を追求していきたいと思う。

■